

6 日 本

放送大学の授業番組制作システム

放送大学 小 林 靖 雄

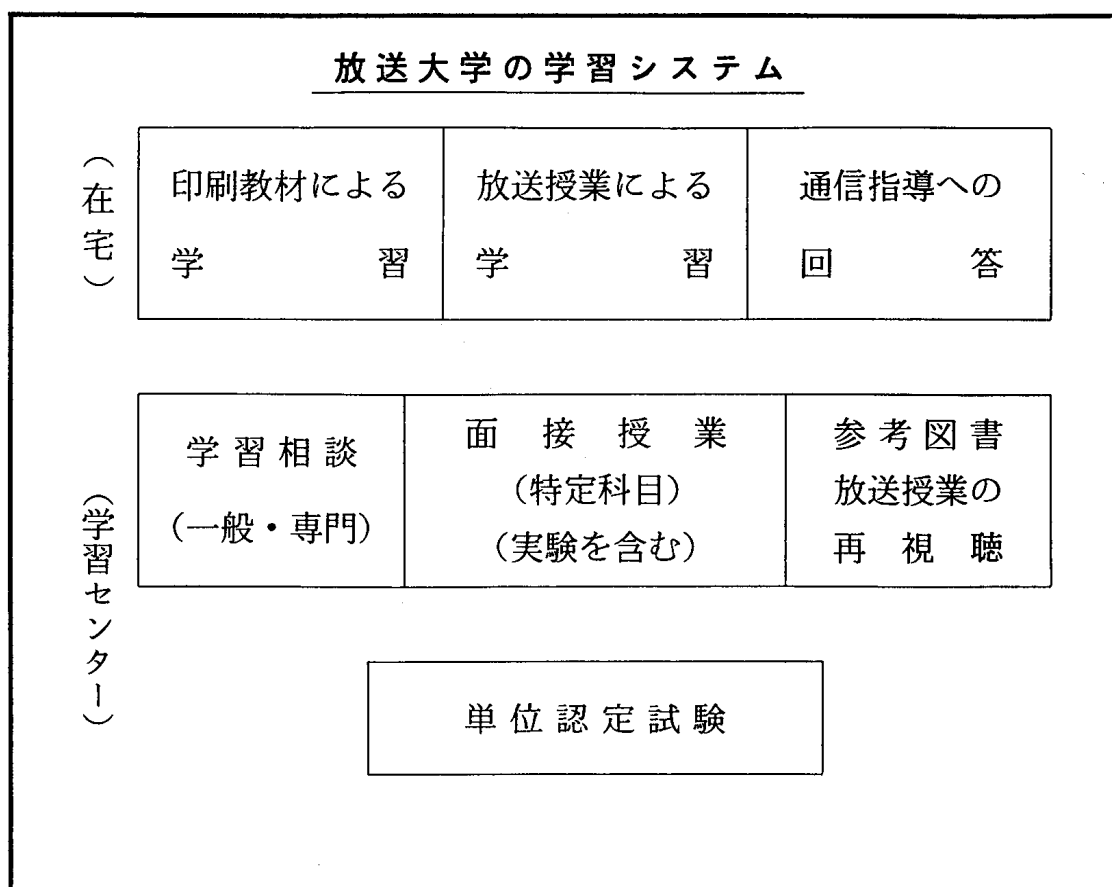


きょうの第1セッションの最後ということで、日本の放送大学の、特に授業の番組をどのようにつくっているか、それから、全部放送で授業をしておりますが、その放送のシステムについてお話を、時間の制約もありますので、簡単にしたいと思います。それではO.H.P. でご説明を申し上げたいと思います。

(O.H.P. 映写)

放送大学の学習システムでございますが、自宅あるいは職場に対して全部の科目を放送授業によって放送しておりまして、それによる学習と、印刷教材による学習、この二つが日本の場合の放送大学の学習のコアになっております。

あわせて学期の途中にいたします郵便による設問に必ず回答をしてもらう通信指導というシステムをとっております。



学習センターまたは、スタディー・センターは現在6カ所置いております。後ほどお話しいたしますけれども、第1期計画ということで現在関東地方の南部の地域だけで計画を進めております。そこでは学生に対する学習の相談を行ないませんが、学習センターには専任の教授1名、それから、助教授が4名もしくは5名配置されておまして、学生に常時コンタクトをしております。特にある時間帯を設けて学習相談を受け付ける一般的な学習相談と、それから、専門の分野にわたりますものは専任教授が主でございますが、全体の専任の教員が各学習センターを巡回しまして、特定の日、時間にいろいろな相談を受ける、あるいは懇談をする、そういう学習相談を学習センターで行っております。

それから、面接授業でございますが、これも今までリポーターの方がいろいろお話しになりましたけれども、現在の日本の放送大学では3学期制をとっております。その3学期の各学期の中で、1学期は15週ですが、15週の中

の10週間を特定の科目、現在で申しますと全体で約170科目の授業が開かれておりますけれども、そのうちの40科目について、専任の教員もしくは非常勤の先生でスクーリングをやっております。

この中には、学習センターにございます実験設備を使った自然科学系の実験も含んでおります。もちろん学習センターにはいろいろな図書、もしくは放送の授業のオーディオ、ビデオのテープをもう一回見たり聞いたりする、そういう設備も持っております。各学期末に、この学習センターで学生が単位認定試験を受けて単位の認定を受ける、こういうシステムが現在の放送大学の学習システムでございます。

そこでは、先ほど申しましたように、現在放送大学で授業番組を一体どのようにしてつくっているかという点と、それから、放送のシステムについて簡単にご説明をしたいと思います。

まず、日本の放送大学で放送授業をどう位置づけているかという点を最初にお話ししたいわけですが、先ほども示しましたように、印刷教材の学習、それと放送授業を視聴して学習する、この二つがコアでございます。放送授業は印刷教材で学習をするための補助であるとか、あるいは学習のスピードをコントロールするための、よく言われますペースメーカーの役割以上のものを、放送大学では現在期待をしております。

要するに印刷教材による学習、これは普通通信制の大学ではそれが中心になりますが、さらにこの放送授業を視聴することで、印刷教材に書いてある内容の重点を十分理解してもらおうというねらいを持たせておりまして、単に補助である、あるいはペースメーカーの役割ということではない。ここに一つ、日本の放送大学が放送授業というものを非常に重要視しておることが言えるかと思います。

それから2番目に、放送の番組をつくり出すときの中心になります教授（主任講師と言っておりますが）、この主任講師の役割といいますか、ウェートについて一つの特徴を持っております。放送大学の放送番組をつくり出すシステムの中で一番大きな特徴は、その授業科目を担当します主任講師、

これは一人の場合もありますし、複数で担当する場合もありますけれども、その人が考え、そして執筆をいたします印刷教材であります。実際は仕事を始めますためにはその印刷教材のまだマニュスクリプトの段階かもしれませんが、これが基本になって出発をするという点であろうと思います。

もちろん、多くの科目がございますから、この科目間の関連であるとか内容について、大学の中での専門分野の専攻部会というのがございます。また、もっと全体的には、大学の教務委員会というコミッティーで検討をいたしますけれども、何よりもその主任講師の構想、考え方というものを中心にしております。

科目によりましては、講義の大づかみなもの、これを「講義要項」と一応言っておきますが、この要項が決定するまでに、分担の講師が、特に複数でつくる場合には数多く討議をいたします。しかし、その前に、そういう段階で、既にディレクターの方とかデザイナーの方とか外部の先生方、そういう方が入るということはありません。

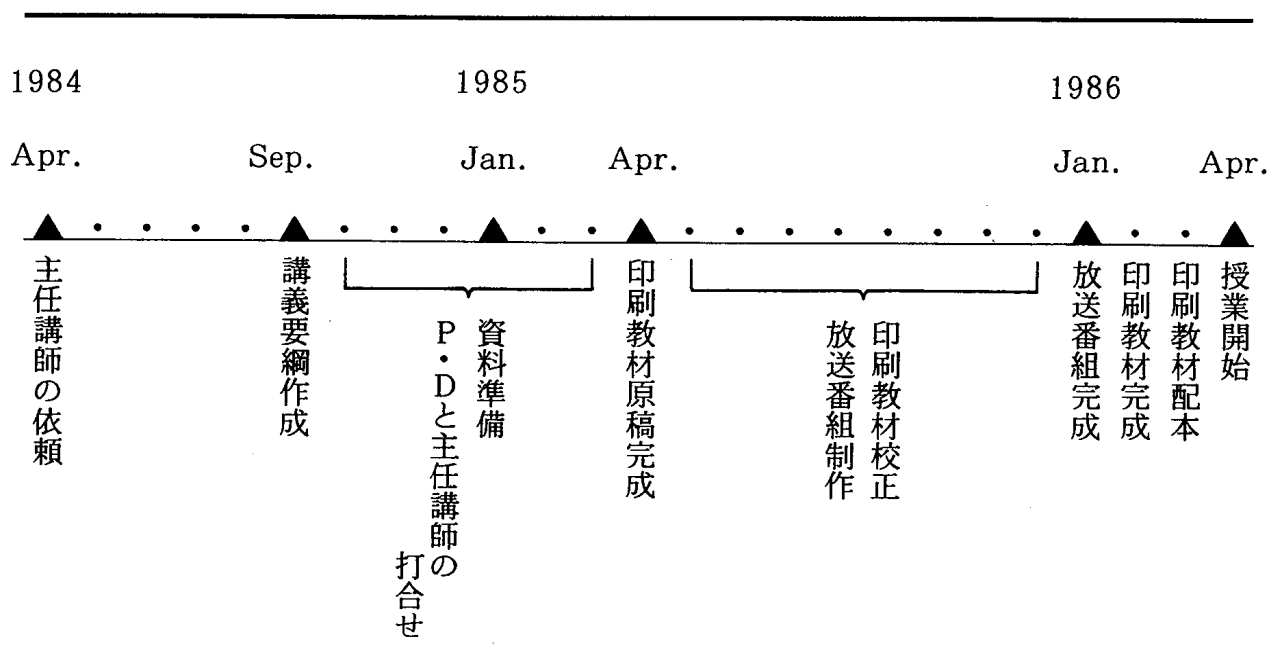
先ほどからのお話にもございましたし、私どもも、放送大学を出発させる前にイギリスのオープン・ユニバーシティーその他で、コース・チームというものをつくって、そこで、担当の教員だけじゃなくて、それと同じ範囲の批判ができるような教員、あるいはディレクター、デザイナー、教育工学の専門家、こういった方が入ってコース・チームでいろいろな検討をし、評価をしながら教材をつくっていくということは十分知っておりましたが、日本で放送大学を出発しますときに、大学の講義として、その講義の内容全般にわたって主任講師に何よりも責任を持ってもらおうという考え方がございまして、その科目の講義の内容の原稿ができるまでは、もっぱらその先生方で一人もしくは数人の先生方でつくっていただく、内容を決めてもらうということを主眼にしております。この点も、後ほど恐らくいろいろご議論をいただくところだろうと思います。

一番の問題は、一人もしくは数人の先生方の何か偏った考え方というものにならないかというような批判であるかと思いますが、放送大学としてはそ

の大学の講義の内容に責任を持っていただくという意味で、そこまではディレクターその他の方が参加しないというやり方をとっております。

2 番目に、番組の制作のいろいろな準備のことを若干申し上げます。後ろ

印刷教材・放送番組作成スケジュール（例）



の方にはちょっと見にくいかと思いますが、大体講義の要項ができるというのは、これは1986年の4月から授業を開始するという場合のことを例にして年度を振ってありますけれども、大体2年前の9月ごろに講義要項ができます。したがって、実際に番組をつくり出しますのは1985年の4月という段階からつくりますので、前年の9月ということで、7～8カ月前ということになります。実はこの段階から、ディレクターの方々等とのいろいろな打ち合わせが始まってまいりますし、同時にいろいろな資料の準備をいたします。

現在の放送は、全授業科目をテレビがちょうど2分の1，ラジオが2分の1に分かれております。特にテレビ番組の場合には、この間の期間で例えばロケーションの必要があるものもございますし、各種の映像の資料を集めたり、あるいはそれを検討する、そして制作のスケジュールを立てていくわけ

であります。特にテレビ番組において、外部の機関が持っているような映像、資料を借用するというようなことで効果を上げるという場合がありますので、その場合は著作権の処理というものが大変大きな問題になります。このぐらいの期間からやっても、やっと処理が間に合うというようなこともございます。

こういった検討によりまして、制作を担当しております部門では、各授業科目ごとに制作の予算をトライアルに立てまして、その全体を集めまして、放送大学学園での委員会を持ちましてその全予算を決定するわけでございます。

具体的な放送番組をつくることについて少し申し上げますが、結局、番組制作というのは、'86年の4月に授業を開始するということになりますと、ちょうど1年前の85年4月にスタートをいたします。実際に番組制作に使っております期間はその半分ぐらい、6カ月ぐらいが普通でございます。

言うまでもありませんが、この段階ではディレクターの方と主任講師との間の意見交換は極めて活発に行われるわけでございまして、先ほども言いましたように、印刷教材の原稿というようなものができ上がっておりますけれども、それをそのまま放送に乗せるというわけじゃもちろんございません。その印刷教材で言わんとしているところの一番重要な点、あるいは理解の非常にしにくい点、そういう点について、特にテレビの場合などは画像を使って一体どういうふうな理解を深めるための工夫ができるかを検討致します。

この点は、そういった画像等の専門家でない主任講師、それとディレクター、あるいは、後ほどお話しいたしますが、いろいろな画像等を扱う人たち、そういう人たちとの協力で、番組を少しでもよりよくつくろうというためには、この期間が長けりゃ長いほどいいわけであります。普通の科目で、45分の1回分の授業を、15週ございますので、15回がちょうど2単位の科目になりますが、6カ月ぐらいの期間を通常かけておることでございます。

ただ、既に外国からおいでになった方も見学をされたと思いますが、すべてその番組を放送教育開発センターが持っておりますスタジオでつくります。

スタジオはテレビ二つ、ラジオ二つだけでございまして、もちろん外部のロケーション等はいたしますが、テレビで45分のものを1本と一応数えますけれども、そこで年間600本、ラジオで大体600本、こういう膨大な放送番組を制作しております。したがって、この4月から始まって、翌年1～2月になりますともう終わりでございますけれども、残念ながら現状ではいろいろな講師の都合がございます。そういうことから、年度の後半に集中してくるということで、制作作業が非常に忙しくなるというのが悩みでございます。

ただ、この大学は専任のスタッフをそう豊富に抱えているわけではございませんので、いろいろな映像資料、それから、ロケーションをやる、あるいはいろいろな必要なテレビのカードをつくる、こういう、放送の素材になりますものを集めたり制作する仕事は、外注という形ですべて外に委託しております。それから、実際スタジオの制作作業、これも多数の技術者を必要といたしますが、これもすべて外部に委託をしております。それら制作作業全般を、主任講師と連携を持っている専任のディレクターが放送教育開発センターと大学で合計25名おりますが、この25名のディレクターが担当をしているわけでございます。

それから、つくられました番組をどういう形でレビューしているかという点をちょっと申し上げますが、大学としてはべつに政府に規制されることはございませんが、自主的に番組の基準、スタンダードというものをつくっております。これは放送局を持つ以上必要なものと考えておりまして、その番組基準に照らしましていろいろな問題点等を発見した場合には、そのための専門委員会がございます。その専門委員会には専任の教員等が参加しておりますが、その委員会でいろいろ検討をし、もちろんその番組をつくる主任の講師の承認を得まして事前の訂正等を行っております。

このような放送番組をつくりますいろいろな手順、あるいは内容でございますけれども、比較的スムーズに今日まで行われてまいりました裏には、かなり前から実験放送というものをやっておりました。その経験が大いに役立

っております。具体的に申しますと、1971年から1975年にわたりましてNHKと日本短波放送の両方で実験放送をやってまいりました。さらに1978年から1984年まで、この放送教育開発センターが民間放送を利用いたしまして「大学放送教育実験番組」というものを行いました。今日放送大学の授業科目を担当していただいております多くの大学の教授の方々が、番組を制作するためのいろいろな経験をそこで得ている方が多いわけであります。

また、先ほど最初に説明しました学習システムというものの全体につきましても、諸外国の経験も参考にいたしましたが、この実験放送ではモニターの学生をいろいろお願いした、そういう経験と調査資料の検討から、今日の放送大学の教育システムをつくり上げていると言っているのだと思います。

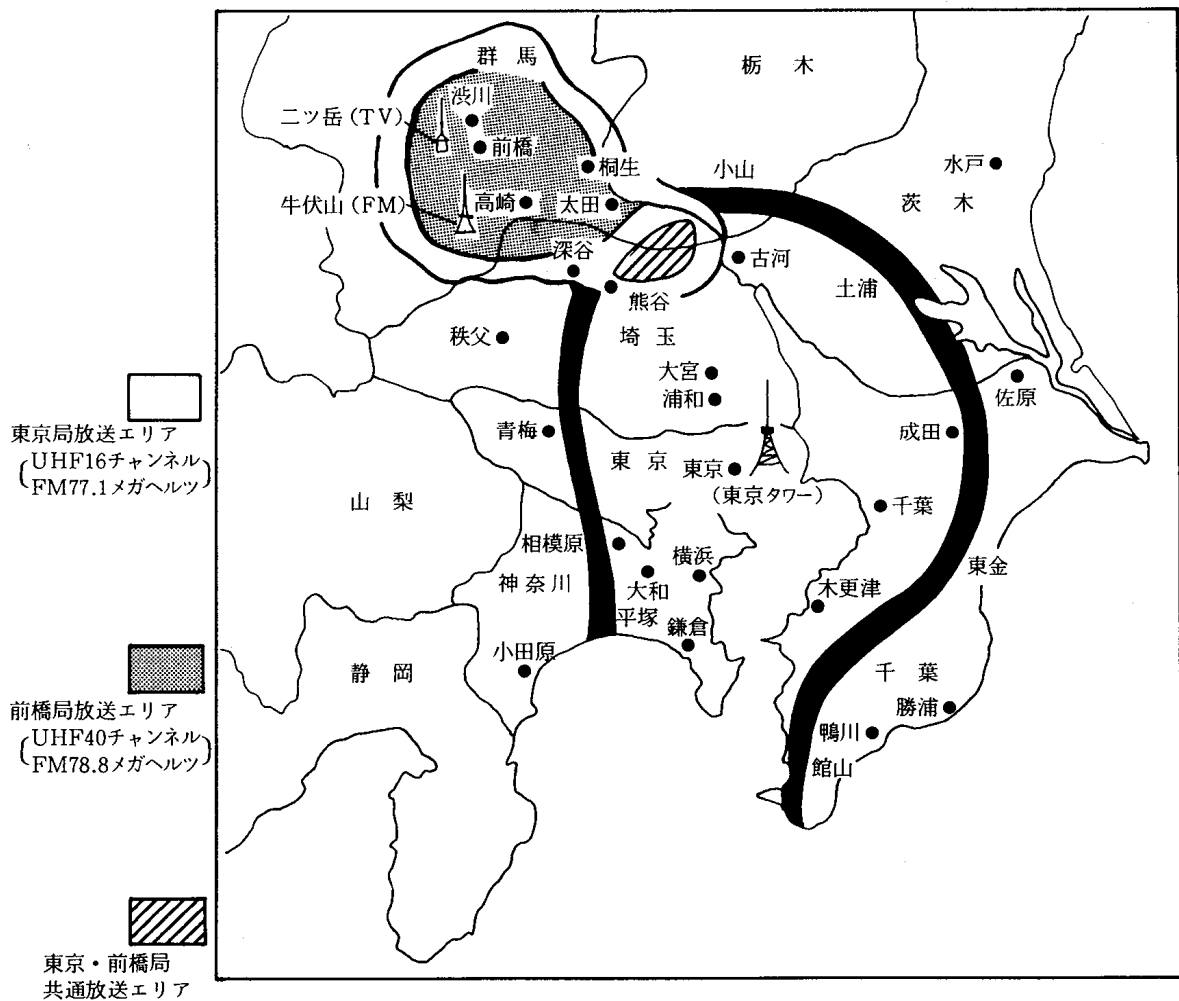
このように放送を非常に重視しておりますが、特にテレビ番組の制作には非常にお金がかかるという点がございます。原則として、一度つくりました番組を4年間は使うということにしております。ただ、いろいろな科目の性質等によりまして、用いている資料、あるいは説明自体、特に統計等の古くなるようなものもございますので、1988年には、まだ3年間にしかありませんが、一部の授業科目について作り直しをやる。その作り直す段階では、今まで担当されました人もある場合にはかえまして、新しい内容で授業番組をつくるということを考えております。

以上、放送番組を制作します手順について申し上げます。

次に放送のシステムについて、余りはっきりしない地図でございますが、最初にお話ししましたように、第1期計画として関東エリアの南の地域で放送をしております。この放送大学の建物の中にあります放送局から、マイクロ回線とNTTの専用線と両方使いまして電波を東京タワーへ送りまして東京タワーから放送をしております。なお、テレビはUHFでございますしラジオはFMの電波を使っております。

なお群馬地域には東京タワーの電波を群馬の地域で一応受信をいたしまして、2カ所のところからさらにUHFとFMのラジオとを放送しているわけでございます。

放送大学のテレビジョン放送・ラジオ放送の電波が届く範囲



1986年の科目はテレビが86科目、ラジオが83科目、合計169科目でございます。他に体育実技が1科目ありますが、これは放送を使いません。毎週朝の6時から夜の12時まで、この大学の所有します放送局によって授業を放送しているわけでございます。

番組表の2学期の一例を、ちょっと見にくいと思いますが、お示ししますと、朝の6時から夜の12時まで放送が行われております。基本基礎科目、いわゆる一般教育に該当するものと、外国語、保健体育、こういう科目につきましては、例えばドイツ語あるいはフランス語でございますが、再放送をできる範囲でやっております。必ず1週間の中に再放送を確保しております。

ただ、専門科目につきまして毎学期とも再放送を確保することは、授業科目がだんだんに増えてまいりますために次第に困難になっておりまして、1

放送番組表 (一部)



UHF
16チャンネル
(前橋局は40チャンネル)

○ 昭和61年 8 月

時 分	金 曜 日	土 曜 日	日 曜 日	月 曜 日	火 曜 日	水 曜 日
6 45	基礎化学 ○	英 語 I ○	基礎化学 ◎	数値計算とデータ処理 (再)	英 語 I ◎	基礎数学 I (再)
7 30	大学窓 財政と金融	大学窓 日本の政治	大学窓 財政と金融 ◎	大学窓 日本の政治 ◎	大学窓 行動科学 ○ (再)	現代社会論 I (再)
8 15	日本経済と産業 と企業	会 計 学 ○	会 計 学 ◎	発達心理学 I (再)	学習心理学 II	心理学概論 I (再)
9 15	住 居 I	現代の経済と 経済分析 ○	現代の経済と 経済分析 ◎	自然系実験 (再)	文学と芸術 (再)	現代の人間観と 世界観 (再)
10 30	日本経済史	脳 と 行 動	日本の自然	ドイツ語 I (その1) (再)	設 計 工 学	生命のしくみ (再)
11 15	発達心理学 II	人文地理学 (再)	作歌・作句	フランス語 I (その1) (再)	動物の行動	経営管理 II
12 15	コミュニケーションと言語	地球と宇宙	宇宙の構造と 進化 ○	生活と芸術 (再)	宇宙の構造と 進化 ◎	保 健 体 育 (再)
13 15	食 物 総 論	食 物 各 論	現代の裁判 (再)	現代政治理論	学習心理学 I (再)	社会生活と法 (再)
14 15	日常生活と法 ○	コミュニケーションと言語 (再)	産業と環境	英 語 I ○ (再)	日常生活と法 ◎	作歌・作句 (再)
15 15	大学窓	大学窓	大学窓	大学窓	大学窓	日本の自然 (再)
16 15	文化人類学	ドイツの 言語文化	特 別 講 義	数理計画法入門	基礎宇宙地球 科学 ○ (再)	地球と宇宙 (再)
17 15	人文地理学	日本の教育 (再)	社会生活と法	知能と創造性	乳幼児の健康と 心理 (再)	哲学的人間学
18 15	発達心理学 I	現代の人間観と 世界観	文化の形成と 普及	記号と人間	ドイツの言語 文化 (再)	現代の経済と経 済分析 ○ (再)

回は必ず放送をなるべく適切な時間帯に、例えば職業を持っているような人たちは朝とか夕方に持っていく、あるいは土曜、日曜に持っていく、家庭の婦人等においては昼間でも聞けるであろうということを考えて番組をつくっておりますが、そういうことを考えましても、専門科目の科目がふえますために、放送の再放送というのが次第に困難になっているというのが一つの今後の問題でございます。

学生がどうやって学習をしているかということについて簡単にご説明いたします。先ほどから繰り返して言っておりますように、放送授業を聞くということを学生の学習の大変重要な部分として位置づけております。もちろん印刷教材の勉強が基礎にあるということは、言うまでもないわけであります。ところが、大体70%の学生は何らかの職業を持っている人間である。そういう意味で、なかなか放送をうまい時間に聞けないということがございます。

放送大学でやりました調査で抜き取り的な調査でございましたが、特に、全科履修生、卒業を目指す学生の70%が既にビデオデッキを持っておる。その60%ぐらいの学生は、現在放送大学のテレビ放送等をテープにとって視聴しているという調査がございます。

そういうことで、非常に多くのパーセントの学生がビデオをとったりしてそれをもう1回聞くということをやっておりますが、先ほどお話ししましたように、学習センターにテレビ放送あるいはラジオ放送の再視聴ができるような設備を準備しております、それを多くの学生が利用しているわけでございます。

今申しましたように全体の放送時間というのが、午前の6時から午後の12時までとなっておりますが、非常に余裕の時間というのは少なくなっております。しかし、その少ない余裕の時間を使いまして「大学の窓」という名前で告知放送、アナウンスの放送をやりますし、また、あいているところで「特別講義」ということで、正規の単位にはなりませんけれども、有名な方、いろいろなフィールドから特別講義をテレビ、ラジオでやはり放送をしております。

3 学期制で、1 学期が4 カ月しかない。その15週を放送授業に充てます。あと残り2 週間の中で、10日間を単位認定試験に充てております。その期間に放送の方はどうしているかということですが、その学期の間に、再放送が困難になっている専門科目等について集中的に連続して再放送をやる。こうすることで、1 学期の時間をフルに放送で利用しているという状況でございます。

予告的な放送、試験放送を始めましたが1984 年の11月でございました。それ以来今日に至るまで、群馬地区も含めまして大きな事故は一つもございませんで、今日まで放送を続けております。大学としては、放送が非常に大きなウエートを持っておりますので、その施設の整備に万全を期しているわけです。

今日までテレビとラジオの放送をフル活用しておりますけれども、その他の新しいメディアについては、只今、放送教育開発センターと共同いたしまして研究試行中のものが多いわけでございます。例えば諏訪という地区でやはり電波がキャッチされておりますが、そこではコンピューターを使った学習、先ほどから出ておりますC A I の実験、これもこの千葉の本部からやっております。

それから、一部の授業科目についてファックスを利用してリアル・タイムに学生の質問に応ずるというような実験を、ことしの2 学期から始めております。

もう一つ、熊本県、これは九州のかなり離れたところでございますが、放送教育開発センターと専用の電話線で結びまして、電話ホーン、それから、電子黒板といいますか、スケッチボードというものだけを使った遠隔のスクーリングを1 科目について実験をしている。

こんなことをやっておりますが、現在この南関東地区でやっておりますのは第1 期計画でございます。できるだけ早い時期に全国化という形で、放送大学の授業が全国で受けられるような形にしなければならない任務を持っておりますが、これをどういう形で全国化へ持っていけるかということについ

て、検討中でございます。その際、最後にお話ししましたような新しいメディアの利用なども含めて、地域を拡大していくときに利用されるだろうと思いますが、現在一生懸命努力をしているという状況でございます。

以上、大変簡単でございましたが、放送大学の放送番組並びに放送システムについてご説明を申しました。どうもありがとうございました。（拍手）